～高き夢をいだけ，そして君が夢みた君になれ～

第60回読書感想文コンクール広島県大会入選おめでとう

夏休みに，１・２年次生のみなさんが課題として，提出した読書感想文の中から，２年２組の諏訪田杏実さんの作品が，呉地区審査を突破し，広島県審査に出品されました。惜しくも全国審査には進めませんでしたが，広島県の入選作品に選ばれました。

「蜩（ひぐらし）ノ記（き）」で学ぶ日本人の美しさ　　２年２組　諏訪田　杏実

美しい作品だった。これが私の率直な感想だ。物語の中で描写される四季折々の自然はもちろんのこと，その中で自分の家族や村を愛し，共に助け合い守ろうとする農村の人々，絶対的な権力を振りかざされ，あまりにも不条理で痛烈な仕打ちを受けてもなお立ち向かい，自分の信念を信じ貫き通そうとする人々，どんなにつらく厳しいことがあっても哀しみに耐えて前を向いて生きていく人々。そのどれもが人間的で生命力にあふれている。なぜ人はこれほどまでに強く生きられるのだろうか。

この作品の時代設定は江戸時代中期から後期である。江戸時代といえば厳しい身分制度による民衆支配が有名だ。本作品の舞台である向山村の百姓たちもまた，身分の高い者たちに支配され，厳しい年貢の取り立てに耐える日々を送っている。上位の者に逆らおうものならば，自分のみならず家族や関わった者たちがどのような酷い仕打ちを受けることになるか分からない。上役たちは百姓の苦しみを顧みず，私利私欲のためだけに動き，人々を支配する。百姓などの下位の者たちはそれに怯え涙ながらに従うしかない。そうしなければ家族や大切な人たちを守ることができないからだ。

現代ではどうだろう。仕事場で理不尽な上司がいたとしても上手く付き合い関係を維持しなければならないし，筋違いなクレーマーにも文句を言わず，ただ平謝りをして対処しなければならない。さらに周りとの人間関係にも気を配り，時によっては，自分の意見を押し殺し相手を優先しなければならないこともある。みんな自分や自分の家族が大切なのだ。大切であるからこそ，腰を低くして社会で生き，必死にそれらを守ろうとする。この窮屈な世界はいつの時代にもそう変わらないのだ。

ところが，郁太郎は源吉の仇を取るため，中根家老の屋敷に乗り込んだ。この謀反に等しい事件を起こせば，自分は確実に死刑にされ，家族も咎めを受けることになるということは郁太郎には分かっていた。それでも実行したのは「自分がすべきこと」を見つけたからだ。

「ひとは心の目指すところが志であり，それが果たされるのであれば，命を絶たれることも恐ろしくはない。」これは郁太郎に助力をした庄三郎の言葉である。彼らは自分の家族を想わなかったわけではない。ただ，「武士」として行動を起こさずにはいられなかったのだ。意志のあるものは強い。そう思わずにはいられなかった。他人を想ってのことなら尚更だ。いや，他人を想うからこそ，ここまで強いのかもしれない。自分が何をすべきなのか，真摯に向き合えば，そこにはいつも他者を想う気持ちが表れる。人間はみな心の奥底に慈愛を持ち合わせているのだろう。

本作の主人公である戸田秋谷は十年という命のタイムリミットを知りながらも残された余生を精一杯生きた。家譜編纂を黙々とこなす一方で，村の百姓たちに寄り添い，共に歩む姿は慈愛に満ちていた。なぜ，余生をたゆむことなく生きるのだろうか。それは命が区切られていることがさほど重要ではないということなのだろう。秋谷は自分がすべきことが分かっていた。それは家族や村の人々など，かけがえのない人々を守ることである。だからこそ，迷いなく自分の命を捨て，郁太郎と庄三郎を守りぬくことができたのだと思う。

死を自分のものとし見つめながらも，その清廉な秋谷の生き様に人々は感化された。「心を変えることができるのは，心をもってだけだ。」秋谷はこう言った。なるほど，確かにそうだ。人は心と心とで向き合わなければ通じない。庄三郎は秋谷と接するうちに考え方が変わっていった。秋谷は愛を持って人々に接する。人の上に立つ者は，下の者の痛みを分かち合わなければならないのだ。源吉は父を想い，秋谷を想い，そして最期の時まで妹を想いながら拷問に耐え死んだ。彼は家族や友人を愛おしむ優しく頼もしい少年だった。郁太郎と庄三郎は源吉を想い，危険を顧みず，家老の屋敷に乗り込んだ。秋谷は郁太郎と庄三郎を想い，自らの命と引き替えに二人を守った。人々は村を守りぬこうとし，互いを思いやる。「この世をいとおしい，去りとうない，と思うて逝かねば，残された者が行き暮れよう。」私は，これこそ日本人の美しさだと気づかされた。

私は「相手を想う」ということがどういうことなのか，この作品に教わった。それは表面上でのやさしさではない。正直な心で相手の心と向き合う，これが「思いやり」の本質である。そして，それは今の日本人の根底に根づいている。窮屈な世界にも愛は確かに存在するのだ。そんな現代の日本人が忘れがちなっことを「蜩ノ記」は思い出させてくれた。家族愛や人間愛が心に染みる。それでいて凛と強く気高い「日本人の美しさ」がそこにはあった。

呉地区の優秀賞として本校から２名の人が選ばれました。（呉地区の代表は６名だけでした。）そして，広島県審査に出品された７０作品の中から，諏訪田さんの作品が入選（ベスト３０）しました。